

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	1930年代の上海における章乃器の抗日統一戦線論 : あわせて緒形康氏の批判に応える
Author(s)	水羽, 信男
Citation	アジア社会文化研究 , 21 : 173 - 186
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49064
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049064
Right	
Relation	



研究ノート

1930年代の上海における章乃器の抗日統一戦線論 —あわせて緒形康氏の批判に応える—

水羽 信男

はじめに

新たな中国近代史像の構築のための努力が、さまざまな形で行われている。そのなかで中国の政治文化の負の側面について肉薄しようとする研究潮流もある。たとえば緒形康は、中国近現代史を「極権主義の起源と生成」の過程とみる視座を提起し、精力的に研究を進めている¹。彼のいう「極権主義」とは、ソ連経由の無神論文化が儒教文化と結合し、個人が沈黙する権利さえ拒否し、個人の私的領域を一切認めず、個の尊厳を踏みにじる体制を築き上げ、加害者と被害者とが隣り合わせとなるような関係を強いるイデオロギーである。具体的にそれは、たとえばプロレタリア文化大革命（以下、文革）時期に凄惨な弾圧を被った知識人の罪状を告発したのが、親友や元配偶者など彼・彼女のごく親しい人物だった、という現実に現れている。

緒形は2015年に2012年出版の拙著『中国における愛国と民主』に対する書評を発表した。緒形の鮮烈な問題意識からみれば、拙著では中国の歴史に内在し「極権主義を精算する方途を見出す」ことはできない、とのことである²。この緒形の水羽批判に対して、当時の筆者は1950年代の中国の議会制度に関心を寄せていたこともあり回答しなかった。とはいえ緒形の批判を契機として、筆者なりに中国共産党（以下、共産党）の問題についても初歩的な考察を続け、その最初の成果が近々公刊される³。だが、そのなかでも緒形の水羽批判について言及できなかった。そこで本稿を通じて、現段階での筆者の考えをまとめておこうと考えた。

というのは、「左派」＝資本主義の弊害を批判する点で共通する一群の知識人＝広義の社会主義者のうち、章乃器ら国民党・共産党から独立・自律した「第三勢力」・「中間派」などと呼ばれる政治勢力は、1949年の中華人民共和

国の成立を歴史的に理解するうえで、いまでも必須の研究対象だと筆者が考えているからである。たしかに拙著の刊行、そして緒形の水羽批判以後、随分と時間が経ったが、この間、日本では章らの 1930 年代の活動に関する研究は停滞している。実証的な新味に欠けるとはいえ、この機会に緒形による水羽批判に答えるとともに、1930 年代の章乃器の議論を筆者なりに再整理し、現段階での見取り図を示しておくことは、当事者による総括として、将来的には意味を持つのではなかろうか。なお緒形の批判は多岐にわたるが、本稿では氏が中心的な論点とした、章乃器と共産党の関係および彼を「民族主義者」とみなせるのか否かの二点に絞っている。

以下、行論の必要に応じて、章乃器 (1897-1977) の経歴をごく簡単に紹介しておく。浙江省で生まれた章は、浙江省立甲種商業学校を卒業後、浙江実業銀行に「徒弟」として就職し、やがて「副総経理」に昇進する。1920 年代の終わりからは言論活動も活発に行い、1936 年に高揚した救国会運動では、非共産党員の代表的な指導者の一人となり、対日妥協を続ける国民党・政府を批判し、国共両党の合作の必要性を説いた。1949 年革命に際しては共産党を支持し、中華人民共和国政府の糧食部長などに任じ「容共的」な立場を示したが、あくまで「個の尊厳」を重視するリベラリストであった。そのため 1957 年の反右派闘争で政治生命を絶たれ、1966 年からの文革では紅衛兵から凄惨な私刑を受けた。

なお上記の説明からもわかるように、本稿で使用する「左派」＝広義の社会主義者には、共産党との連携を政治的に必要だと認めた「容共」リベラリストをも含んでいる。筆者は 1930 年代の英国労働党左派の理論的指導者といわれ、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの教授であったハロルド・ラスキラをリベラリストと考える人々と立場を同じくしている⁴。

1. 章乃器の「左派」内部での位置：日中全面戦争開始前夜

章乃器らの抗日と民主を求める運動に対する共産党の関わりについて、たとえば章も参加した 1934 年の民族武装自衛運動が、コミンテルン駐在の共産党の代表・王明やコミンテルン極東局からの働きかけを受けて、宋慶齡が発動したものであったことを根拠として、共産党の指導を強調する立場があ

る⁵。緒形も章乃器と共産党との関連の深さを指摘して、その影響力を筆者が軽視しているとみなしている⁶。

だが、緒形も参照している回想録⁷で章乃器は、宋慶齡が呼びかけたから民族武装自衛委員会の発起人に名を連ねたが、運動は上海ではせいぜい社会的地位の高い人びとの間で署名活動が行われる程度だと考え、「態度は消極的だった」と述べている。また救国会運動においても、1937年7月に日中全面戦争が始まるまで、周新民、銭亦石ら共産党秘密黨員は党籍を明らかにせず、彼らから共産党に従うようにとの指示もなく、共産党の指導は「形式を持たず、また痕跡もとどめない」ものだった、という。この回想は文革中の1967年に執筆されたものであり、章乃器にとって共産党との関係を敢えて隠す必要はなかった。また章乃器は王造時とともに1941年春に救国会から離脱するが、それは章らの日中中立条約への批判を、救国会のメンバーが一度は認めながらも、周恩来の説得により取り下げたからであった⁸。章乃器は、少なくとも主観的には共産党から独立・自律していた。

この点に関わって共産党の「指導」について、筆者の理解を示しておく⁹。1930年代半ばまではコミンテルンと共産党中央との連絡が不十分だっただけでなく、党中央と上海などの支部との連絡も切断されていた。国民党の弾圧により共産党の支部組織は解体され、個々の黨員は弾圧の危機の中で個別に闘うしかなく、筆者は1930年代半ばにおける共産党の指導について、次の4つのディメンションに分節する必要があると考えている。①モスクワのコミンテルンからの指導、②陝北の共産党中央からの指導、③地方の共産党支部の指導、④個人黨員の活動の四つである。

1930年代後半以後は、この4つは並列するのではなく、しだいに①→②→③→④と「民主集中制」のもとで整序されてゆく。しかし1930年代半ばまでの共産党の組織が、「鉄の規律」のもとにあったとは考えがたい。後述するように、1930年代半ばにおいては、共産黨員相互でも統一戦線についての考え方が一致していたわけではなく、コミンテルンの指導を受けながら、共産党中央を含め、試行錯誤が行われていたことを分析の前提としなければならない。そうした状況下、「左派」内部では共産黨員と非共産黨員との間に原則的には対等・平等な関係が築かれ、協力とともに対立の側面も含めて、運動

が進められていたと考えるべきであろう。

その一例が 1936 年半ばの救国会運動の高揚とともに展開された「国防文学論争」だった。この論争の一方の当事者であった魯迅は、上海の非共産党員の「左派」の象徴的人物の一人であったが、国防文学をとこなえる共産党員の周揚たちに対抗して「民族革命戦争の大衆文学」を提起した。論争の詳細な紹介は割愛するが、周揚らが国防、すなわち抗日を唯一の文学的課題として、あらゆる政治勢力を含めた統一戦線の樹立を目指したのに対して、魯迅は周揚らの運動は創作の自由を認めず、統一戦線の強調による「革命」の曖昧化をもたらすと批判した¹⁰。

国防文学論争における魯迅の行動は、彼の周揚らに対する個人的な不信感に起因していた側面もあり¹¹、周らの側も魯迅の人格批判ともいえる言説に反発してゆくが、この過程で周揚たちから魯迅をトロツキストとする声が上がってゆく¹²。いうまでもなく、当時の共産党の用語法に従えば、トロツキストは革命の裏切り者である。

共産党中央が両派の対立の解消に努めるなか、魯迅が 1936 年 10 月死去した。当然、「左派」は魯迅の葬儀を抗日運動発展のための手段として利用しようとした。前掲の章乃器の回想録によれば、この過程で魯迅に私淑していた非共産党員の胡風らが、魯迅は国際主義者であり章乃器ら民族主義者が棺を掲げるのは似つかわしくないと批判したという¹³。

この点をめぐる記述をめぐっても、筆者は緒形に批判された。緒形は、章乃器が 1960 年代の毛沢東・共産党による胡風批判に巻き添えにされないために、彼自身がソ連やコミンテルンとも関係を持ち、一国の枠にとどまらない国際主義者であったことを隠蔽したとみなしたのである¹⁴。たしかに緒形が言うように、章乃器が文革下の回想録の執筆において、胡風批判に巻き込まれないための政治的な配慮をおこなった可能性は否定できない。

だが、胡風にとって国際主義とは、ソ連など海外の政治勢力との繋がりの有無を問題とするものではなく、魯迅が中国の変革を求め、変革できなければ、中国よりも日本が発展するのは当たり前だと指摘したこと、つまり狭隘な民族主義から魯迅が自由だったことを意味していた。国際主義者・魯迅の生涯の目的は中国の進化であって、民族主義者とは異なり、進化無き中国に

真の解放はありえなかった¹⁵。したがって、ここで胡風がいう民族主義とは、日本の勢力を中国から駆逐することのみに議論を集中し、階級や主体性の問題を軽視する人びとを指していたと理解してよい。「国防文学論争」における胡風らの文脈に立ち返れば、周揚らの主張である。その意味において章乃器や救国会の他のメンバーたちは、同じ「左派」ではあっても、魯迅や胡風たちとは異なり、むしろ周揚に近い立場にあった¹⁶。

それは、たとえば 1936 年 10 月からの反「差不多」運動に際して、章乃器がトロツキストを批判したことからも見て取れる¹⁷。この動きは魯迅亡き後に国防文学論戦を継承したものとも言われ、若手の「左派」作家たちが紋切り型の表現で民衆のナショナリズムを呼び起こそうとして、「大差のない」（「差不多」）個性の乏しい作品を書いている、トリベラル派の沈從文が批判したものであった¹⁸。こうした国防文学的なありように懐疑的な沈從文の言説を、章乃器は名指しこそしなかったとはいえ、トロツキストというレッテルを貼って批判したのである。前述したように周揚たちは魯迅をトロツキストと批判したことがあり、章乃器も周揚同様に統一戦線の樹立を最優先していたことが理解されよう。

2. 章乃器の「左派」内部での位置：日中全面戦争開始直後

1937 年 9 月 1 日章乃器は上海の有力紙『申報』紙上で「少号召多建議」という評論を発表し、対日抗戦が始まった現在、政府への批判的なスローガンではなく、具体的な政策提言が必要だと強調した。この評論の背景には、当時の上海の民衆運動の現実があった。章乃器が紹介するところによれば、俞鴻鈞上海市長は「皆は救国ではなく、ただ自己の団体の救出だけを求めているようだ」と発言している。また共産党員であり、救国会運動の指導者の一人であった錢俊瑞も、セクト主義的な対応が、政府系の団体だけでなく、「左派」の団体にもあったと 1937 年の末に総括している¹⁹。

あれこれの団体が自らの主張を展開するのではなく、国民党・政府を中心に現実の日中戦争を効率的に戦うべきだという考えは、当時の上海の論壇で共有された議論の一つだったのである。それは国民党・政府が抗日姿勢を明確に示し、国共の再合作も公的に認め、平型関の戦いで八路軍が「勝利」し

たとの報道によって世論が沸騰するという当時の政治情勢に後押しされていた。

とはいえこの時期、「左派」の一部が上海のメディアで章乃器を批判した。日本の社会主義文献の翻訳に尽力し、章乃器らの救国会運動とは一線を画していた施復亮²⁰が、ただちに「多号召多建議」と題する評論を『文化戦線』2期（1937年9月11日）に発表したのである。その章乃器批判の論拠は、中国の民衆はまだ政治的覚悟と政治的組織をもっておらず、この段階では政府への建議だけでなく、民衆への働きかけ（「号召」）が不可欠だとの認識であった。施復亮にとって、国民政府も民主的に変革される必要があったが、中国の民衆もそのままで日中全面戦争の担い手となりうる存在ではなかったのである。

いかにして民衆を組織化するのか、という問題をめぐっては、章乃器が10月に入り「平凡な指導」「平凡な組織」の重要性を説き、施復亮と改めて論争した。章乃器は中国の農村における郷紳と農民の関係を指導・被指導の関係に読み替え、こうした関係性が貫徹している冠婚葬祭の組織や農作業の互助組織に着目して「平凡な指導は争うべきところのない指導であり、同時に深く大衆〔のなか〕に入ることができる唯一の指導である。平凡な組織とは簡単に阻碍できないものであり、同時にもっとも依拠すべき組織である」と指摘した（以下、[]内は筆者注）²¹。

施復亮はこれらの組織と指導を維持したままでは、実質的には従来の農村における抑圧を存続させることになり、民主化のための日中全面戦争を闘うことは不可能だと厳しく批判した。施復亮によれば、「“広大な落伍した群衆”を逐次組織し、指導しなければならぬのである」²²。施復亮にとっては、既存の支配・被支配関係を克服することを準備するため、貧しいがゆえに政治的な自覚に乏しい人びとを組織化することが必要だったといえよう。施は彼なりに国民革命時期の劇烈な民衆闘争の「過火」——地主に対する人権無視の凌辱や略奪など——を再燃させずに、民衆を民主化のための抗日に立ち上がらせようとしたのである。そうした問題関心は、当時の章乃器にはなかった。

潘漢年は共産黨員で全面戦争開始までは国民党との秘密交渉に従事していたが、9月19日付け発行の『抵抗』第10号において、中国の民衆を組織する基層団体として、農民協会、労働組合など国民革命期と同様の階級的・階層的利害に基礎をおく団体を想定し、その活性化による民衆動員を目指した。その論拠は大衆の利益を保障しえない団体が組織化に成功するはずもない、という点にあった²³。

章乃器は潘に対しても真っ向から批判した²⁴。

北伐時期には、われわれは労働者・農民自身の利益の要求によって組織化を呼びかけることができたが、現在は不可能である。現在は口を酸っぱくして言い、彼らの民族意識を啓発し、しかるのちに彼らを再組織するよりほかにしようがないのである。

その理由として章乃器があげたのは、以下の点であった²⁵。

統一戦線を強固にするためには、極めて大きな誠意および最大の寛容が必要でもある。……われわれは一個人の過去の経歴と経済基礎を再び過度に重視してはならず、ただ彼の現在の抗戦に対する熱情だけを見ればよい。これがわれわれがもつべき寛容である。

潘漢年のように労働組合や農民協会の組織化を訴えることは、当時においては1920年代の民衆闘争の「過火」を想起させたと思われる。まして潘が北伐における労農大衆の闘争を高く評価しつつ、「まず下層の基本群衆の自発的な積極性を引き出し、しかるのちに各級の代表制度を設立し、平等で民主的な方式で各種の指導機関を推薦して選ばなければならない」と1920年代の権力論を再提起したとき²⁶、かつての「過火」に対する少なくない人びとの恐怖を呼び起こしたことは、容易に想像できよう。

少なくとも章乃器にとって、動員のためには遅れた大衆が「聞き慣れ、見慣れた方法を多々利用する必要がある。しかし、当然われわれは適当な時期に、絶えず方法〔の質〕を高めなければならない、落伍した方法を利用するの

は、われわれの門を開くために過ぎない」のである²⁷。こうした章乃器の姿勢は、決して少数派ではなかった。たとえば銭俊瑞も、1938年の初めに「一切の新しいものは古いものの中から生まれ出る」と述べ、「一時の痛快さ」を求めて、国民党が組織した抗敵後援会を無視するような対応をするべきではない、と章乃器と同様の呼びかけを行っている²⁸。なお潘も銭も共産党中央の指示に基づいて動いていたと思われるが、この二人の共産党員の対応の違いの背景・要因については、今後の検討課題である。

3. 章乃器の言論の特質：可能性と限界

筆者の関心は1949年に共産党が勝利し得た要因の解明にあり、また今日の中国とは異なる歴史を作り出す「可能性」の有無と、それがあつたとすれば、なぜ実現しなかったのかの追究にある。その意味で毛沢東・共産党の統一戦線論における自主・独立の問題に関する、次のような今井駿の問いかけに今日でも強い関心をもっている²⁹。

どのような仕方において、「統一戦線」内部の相手を肯定し、自己を否定することが、現在のような統一の在り方＝対立の在り方そのものを止揚してゆくことに連なるのか。

今井が上記のように発言した背景には、毛沢東と王明の対立点とされた共産党の「独立・自主」をめぐる問題があつた。毛は「統一戦線中独立自主問題」（1938年11月5日）で国民党に対する四つの対応策、すなわち「さきに報告してあとで処置する」（先に国民党の同意を得る）、「さきに処置してあとで報告する」（既成事実をつくる）、「処置しても報告しない」「処置も報告もしない」の使い分けが肝要であるとしている³⁰。

だが、統一戦線政策が当面の最大の敵に勝利する「戦術」的な意味だけでなく、新たな政治権力の樹立を目指す「戦略」的な意味を持つのであれば、これまでの敵対勢力との統一戦線の形成・維持・発展において、今井の説くように従来の「自主」的な政治主張を留保し、あるいは変更しなければならない。自らの過去の言説を「自主」的に否定することで活動の空間を確保し、将来

における自らの指導権を打ち立てるための準備をおこなうことが重要となるのである。こうして現在の自らが弱勢にあるという状況を転換させる可能性を高めてゆくことができる。中国が持久戦により日本に勝利するとすれば、共産党の「自主的」な自己否定ないし自己抑制は長期にわたらざるをえない。統一戦線政策を毛沢東的な政治的駆け引きのレベルのみにとどめるわけにはゆかないのである。

「独立・自主」の問題は、国民党との関係だけでなく、「左派」陣営内部において「言論の自由」などリベラルな諸価値をどこまで認めるのか、という問題でもある。というも「左派」内部において——たとえ共産党内部であっても——個人やそれぞれのグループが主体的な自らの意見を持つことは避けられず、彼・彼女らの「独立・自主」をどう取り扱うのか、という問題が生じるのは必然だからである。そしてこうした主体性を認めてこそ、組織の活力や自浄能力が保障されるのであろう。さらに共産党が新たな権力の樹立を目指すならば、「独立・自主」の問題は最終的には国家あるいは集団のなかで、「言論の自由」などのリベラルな諸価値を如何にして保障するのか、という問題にまで行き着かざるをえない。

この問題に関する本格的な検討は稿を改めざるをえないが、章乃器の言説の変化は有益な示唆を与えてくれよう。日中全面戦争の始まる前、章乃器は抗日統一戦線という形式を作り出すためには、リスクを冒してでも、「左派」として、国民党・政府を批判した。しかし自らが希望する抗日統一戦線という形式がひとたび生まれれば、現状を維持することを第一の課題としたのである。章乃器は施復亮に対する批判のなかで、次のように述べている³¹。

われわれは統一戦線の立場に立ち、統一戦線を第一に重要な形式とする。統一戦線は組織されていないのだろうか。それは明らかに一個の基礎を築きあげており、ただ我々がそれに参加し充実させることを待っているのである。

本稿第2節で議論した点も加味すれば、章乃器は階級的な利害に基づく闘争ではなく、既存の社会関係のなかで統一戦線を構築し、その枠組みのなか

での民主化を追求したといえよう。彼は共産党の発展や革命の進展を第一に考えるのではなく、中国の存続のために抗日統一戦線を強化することを最重要視したのである。全面戦争が始まるまでは統一戦線政策へ転換するように厳しく批判した国民党・政府を、抗戦以後は尊重したのはまさに胡風が表したように、章乃器が「民族主義者」だったからである。その意味で彼は戦争の開始前後で一貫していた。

しかし同時に章乃器の1936～1937年の言説には、胡風が違和感を示し、施復亮や潘漢年が問題とした点があった。すなわち彼は抗日政策の実行のためならば、旧態依然たる農村の支配・被支配関係の維持をも容認しかねなかった。さらにいえば民主主義を担う主体としての民衆を政治的に陶冶することについて、当面の課題とはしなかった。この点に関わって示唆的なのは、小山や田剛によれば、章乃器が支持した周揚は毛沢東と文学観を一致させており、両者はともにあるべき理想やその実現の方法に文学は従属すべきだと考えていたことである。魯迅や胡風は彼らと本質的に異なり、文学の独自性・自律性を最重要視していたが、彼らが求めた作家の創作の自由は、毛にも周にも肯定されることはなかった³²。

筆者なりにこの点を敷衍すれば、章乃器は当時の共産党に対しては組織的に独立し、思想的にも自律していたが、人々が共通に支持し支えるべき理想や採用すべき方法の唯一性を強調した点において、毛沢東と思想的に共鳴しあっていた。章乃器はパーリンがいう「消極的自由」ではなく、「積極的自由」を支持するリベラリストであり、彼が考える理想とその実現の方策に人々は従うべきだと考え、疑義を示す人々に対しては非寛容であり、この点では毛沢東と同質だったのである。この点については、たとえば彼の次の発言が象徴的である³³。

上海編輯人協会の主編する『文化戦線』が、どうして施復亮先生の反統一戦線の大本営に変化してしまったのか [について検討すること] を、われわれもまた無視したと私は考えている。この無視のもとで、どれだけの青年がすでに彷徨し自失し、一日中苦悩しているのか、私はまったく見当もつかない。

ここで章乃器は施復亮に「反統一戦線」とのレッテルを貼り、上記の記述につづけて施復亮が考えを変えない限り、統一戦線から排除する必要があると強調している。

おわりに

緒形の関心は共産党がつくりだした政治文化の由来を問うということであり、共産党員ではない「左派」知識人と共産党との「共犯関係」を剔抉することにあつたといえよう。こうした分析視座を設定することにより、これまで見えなかった諸問題が明らかにされたのであり、その研究上の意義は高く評価されるべきである。だが、拙著に対する個別の批判には、上述したように筆者には受け入れ難い点も含まれている。

章乃器は共産党とは別の立場から、「民族主義者」としてかつての敵とも統一戦線を構築し、それまでの政治路線を封印することで、新たなヘゲモニーの獲得を目指すことの必要性を強調した。それは当時の共産党員の一部とも共通する議論であり、章乃器ら「第三勢力」・「中間勢力」は共産党中央の統一戦線論の形成にも影響を与えたのである。これまでの筆者の仕事は、一貫してこの点を実証することを目的の一つとしてきたともいえる³⁴。

だが統一戦線を通じて、日本の侵略に対する抵抗を貫徹することが、当時の課題であつたとしても、それが誰のための・何のための抵抗なのかを問う必要があつた。まして日本の侵略を排除したのちの新たな中国政府のありようを統一戦線の発展を通じて展望するならば、広大な領土に多数の民族が共存し、伝統的な社会規範が根強く、同時に凄まじい格差社会が形成されていた中国において、その答えは一つではなかつた。また多数決だけですべての問題が解決できるわけでないことは、ジェンダーによる支配や少数民族の問題を持ち出すまでもなく、明らかであろう。

だが章乃器にとっては、彼が理想とする目的に向かつて、彼が正しいとする方法によって、統一戦線を維持・発展させることだけが課題となつた。そのことに反対する人間に「反統一戦線」論者とのレッテルを貼り、排除するセクト主義的な傾向を示したのである。ここに彼の限界があつた。そして章乃器も、最後には「左派」内部で反共産党分子として断罪されたのである。

しかし自らの掲げる理想とそれを実現する「正しい」方法を唯一のものとして信奉することにより、排他的になるというのは章乃器だけでなく、当時の共産党を含む「左派」内部に根強く存在した言論・行動のパターンの一つであったように、筆者には思われる。当時、国民党に対して劣勢にあった「左派」にとって、国民党の硬軟取り混ぜた切り崩し工作から組織を防衛し、かつ構成員の自由を保障するという課題は、極めて困難なものとなった。そして共産党を含む中国の「左派」は、1949年の中華人民共和国の成立以後も、外部の「敵」に対するだけでなく、章乃器の生涯が示すように自らの陣営内部の異見に対する排除と粛清という宿痾を根絶できなかつたのである。

この困難な研究課題について緒形に学びつつ、緒形とは異なつた方法で、筆者も向き合いたいと考えている。

註

1 石井知章との共編『中国リベラリズムの政治空間』（アジア遊学 193号）勉誠出版、2015年、石井知章・鈴木賢との共編『現代中国と市民社会：普遍的「近代」の可能性』勉誠出版、2017年、黄俊傑、緒形康訳『儒教と革命の間：東アジアにおける徐復観』集広舎、2018年など。

2 緒形康「愛国と民主の背後にあるもの：水羽信男『愛国と民主：章乃器とその時代』（汲古書院、2012年）を読む」『現代中国研究』第35・36号合併号、2015年、142頁。この書評には、逐一は指摘しないが、緒形の誤読などもある。しかし総じていえば筆者は緒形のコメントから多くを学び、衷心から感謝している。

3 水羽信男「毛沢東の統一戦線論：1935～1937年を中心として」石川禎浩編『毛沢東に関する人文科学的研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター、2020年2月公刊予定。

4 筆者が「容共」リベラリストについて論じた初期の論稿の一つが、水羽『満洲事变』前夜(1928～1931年)における羅隆基の『国民』像』『史学研究』208号、1995年である。

5 邵雍「中国民族武装自衛委員会述略」『党史研究与教学』2008年第3期、傅強「中国民族武装自衛委員会若干史実考辨」『上海党史与党建』2015年第10期など。

- 6 前掲、緒形「愛国と民主の背後にあるもの」143頁。
- 7 以下、章乃器「我和救国会」（1967年12月）章立凡編『章乃器文集』（下）華夏出版社、1997年、640・638-639頁。
- 8 前掲、水羽『中国の愛国と民主』91頁も参照のこと。
- 9 水羽信男「抗日民族統一戦線史研究の課題：平野正『北京一二・九学生運動』をめぐる」『近きに在りて』第16号、1989年。
- 10 中国の近現代文学史や魯迅については、さしあたり阪口直樹『中国現代文学の系譜：革命と通俗をめぐる』東方書店、2004年、小山三郎『魯迅』清水書院、2018年などを参照のこと。
- 11 片山智行「魯迅のリアリズム（IV）：「国防文学論戦」の一側面」『人文研究』第30巻第2号、1978年。また片山智行『魯迅：阿Q 中国の革命』中公新書、1996年も参照のこと。
- 12 馮雪峰「有関一九三六年周揚等人的行動以及魯迅提出“民族革命戦争的大衆文学”口号的経過」『新文学史料』1979年第2期、249頁など。
- 13 前掲、章「我和救国会」633頁。
- 14 前掲、緒形「愛国と民主の背後にあるもの」143-145頁。
- 15 後藤岩奈「胡風の著述に見る魯迅とその文学」1-7（『国立新潟女子短期大学研究紀要』39号～45号、2002-2008年）、特に2を参照のこと。
- 16 秋石「魯迅、黄源同生活書店風波由来考辨」『新文学史料』2004年第1期など。
- 17 章乃器「反不凡主義」（1937年3月13日）章乃器『出獄前後』上海雜誌公司、1937年、1-5頁（なお『出獄前後』に収録された文献のうち初出が確認できたものは、その書誌情報を示す）。
- 18 この時期の沈從文の言論活動については、飛舟「從“反差不多”看沈從文の文芸觀」『上海師範大学学报（哲学社会科学版）』1981年第1期、馬俊山「“反差不多運動”三十年代自由主義文学思潮的尾声」『遼寧師範大学学报』1996年第6期、劉東方「關於1936年“反差不多”論争的当代再思考」『文芸争鳴』2011年第17期などを参照した。
- 19 章乃器「現階段的救亡工作」『抵抗』第11号、1937年9月23日、3頁。錢俊瑞「現階段的救亡運動的中心任務：給救亡工作同志的公開信之三」『抵抗』第32号、1937年12月29日、4-5頁。この点については水羽信男「抗日戦争と中国の民主主義：章乃器の民衆動員論を素材として」『歴史評論』第569号、1997年も参照のこと。
- 20 施復亮については、水羽信男『中国近代のリベラリズム』東方書店、2007年を参照されたい。
- 21 章乃器「平凡的領導和平凡的組織」『抵抗』第19号、1937年10月19日、

7頁。とはいえ施復亮と章乃器はともに、1945年12月に成立した民主建国会の指導者となった。

22 施復亮「論“紳士の領導”与“帮忙的組織”：請教章乃器先生」『民衆呼声』第6期、1937年11月5日、5頁。

23 潘漢年「群衆動員的基本問題」『抵抗』第10号、1937年9月19日、3頁。緒形はこの論説を潘漢年が執筆した背景に、共産党中央の政策転換があったと理解しているが(145頁)、にわかには賛成しがたい。この点については、前掲、水羽「毛沢東の統一戦線論」で論じている。

24 章乃器「負担起来新時代的艱苦任務」前掲、章『出獄前後』104頁。

25 章乃器「現階段的救亡運動」『国民周刊』第16期、1937年10月29日、381頁。

26 前掲、潘「群衆動員的基本問題」3頁。

27 前掲、章「平凡的領導和平凡的組織」7頁。

28 錢俊瑞「目前救亡運動組織和行動上的弱点」『抗戰』第34号、1938年1月6日、7頁。

29 今井駿『中国革命と対日抗戰』汲古書院、1997年、333-334頁。

30 毛沢東「統一戦線中的独立自主問題」『毛沢東選集(第2版)』第2巻、人民出版社、1991年、540頁。

31 章乃器「答覆施復亮先生」『国民周刊』第19期、1937年、451頁。

32 小山三郎「中国共産党の文芸政策に見られる政治的論理：魯迅像の検証との関連から」『法学研究』第54巻第9号、1981年、田剛「“兩個口号”論争与党的抗日民族統一戦線政策」『東岳論叢 魯迅研究』2009年第9期。ただし筆者は、田の伝統的な王明評価には違和感をもっている。

33 前掲、章「答覆施復亮先生」452頁。

34 その嚆矢が水羽「抗日民衆運動の展開とその思想」池田誠編『抗日戦争と中国民衆』法律文化社、1987年である。